神兵稜威考
御言向

1000
10

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

特1000
10

帝國圖書館藏

昭和十七年十一月廿五日 帝國圖書館

兎田文庫

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

この理しを考へ彼至
皇大神宮の大神心ゐて住吉
大神の清き魂向ふとき指ゐ
ゐ給ひしを友ゐる武蔵の国人
藤原淑之語ゐ神習派志心ゐ
生死の清霊神ゐ一社建ま
作生一所ゐし探索り以て冬と
第ゐ
文久二年といふ手流ゐ
芸未国人 印

# 序

神功皇后有事于三韓。彼稱以爲神兵不敢抗逆。此靡然所以懷柔者。蓋畏其德輝之稜威而中心服從者爲耳。而吾皇后亦無所掠虐也必有兵。我櫃亭氏所著神兵稜威考。嘗詳明斯意。今又於古事記日本書紀。自三韓之役。迄

苟有關係者。悉鈔出之。考諸和漢之群籍諸家之確說。爲釋以曰續編。凡奇古之言。神怪之談。無不通曉焉。以使人知神武懿德。我丙皇朝之良智良能。而固有異海外諸國。神兵作稜威。洵有其淵源。甲乙可謂槿亭氏之學勉且精。此書能約而盡矣。然而正編已題鄙言。及斯編成又囑予曰。足下已序正編。斯編奚復需他人之爲。因不敢揣固陋。執筆引其端云。

文久辛酉秋九月中澣

河肥　利根川鑒謹撰

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

# 神兵稜威考

藤原淑蔭謹撰

三韓の御征伐ハ皇國ノ異邦の服從ふ最初ホーて年歴ひさく邈ホ乍ら今畏くも其事件を原ね奉るホ古事記ホ帶中日子天皇坐穴門之豐浦宮及筑紫訶志比宮治天下也云云其大后息長帶日賣命者當時婦神故天皇坐筑紫之訶志比宮將擊熊曾國之時天皇控御琴而建內宿禰大臣居於沙庭請神之命於是大后婦神言教覺詔者」

天皇漢様の諡號仲哀天皇大后ハ神功皇后と申ス元て

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

御代、この漢様の諡名日本紀私記に、師説神武等諡名者淡海御船奉勅撰也、とあるは時を桓武の朝と或説に日本書紀八ノ二年二月幸角鹿即興行宮而居之是謂筒飯宮三月天皇巡狩南國至紀伊國而居于德勒津宮是時熊襲敎之不朝貢天皇於是將討熊襲國則浮海而幸穴門夏六月天皇泊豊浦津九月興宮室于穴門而居之是謂穴門豊浦宮八年正月幸筑紫云云入周浦到儺縣因以居檀日宮と有て書紀八古事記よりも事實く細やかなる物を記さゞれども文體もさふるに漢文にて最さふときを以てなれば此御撰かと思はるゝ乾坤父母風陽侯舉浪などは其他神武紀に大設牛酒景行紀に力能扛鼎と見えさる皆漢土の事を記せる文字を其儘書るものなれば我國上古の事實はこれざるおゝ多く然れば我國上古の事記を本として書紀を用ひ今此書名古事

あるあとのことを挙て全くゝ記さゞるかと〇訶志比宮（カシヒノミヤ）も和名抄も筑前國糟屋郡香椎（加須比）郷此地なり今も香椎村も香椎廟ありて仲哀天皇ありと也神功皇后ありとも申して決らざる由なり延喜式も豊前國宇佐郡大帯姫廟神社とある八宇佐宮三座の一つなり此二社の外も廟と云へるもあれど無範記も香椎大多羅志姫宮とおもひたるを神功皇后なりとおもひたがひ也三韓國服從（マツロヒ）云々御代も彼國より此皇后の御霊を奉齋（イハヒマツ）る宮もやあらむと本居氏の説ありさも有るべきかと〇熊曾國（クマソノクニ）八神代紀も日向襲（ソ）とある地にて和名抄も大隅國姶唹郡とあるより是より景行紀も襲國とあり筑紫嶋を四つとして其一つを云、後の日向の南方半國を

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

このより大隅薩摩の地まですべて云〻上代の大名なり○控御琴ノ八神の命を請申ゝるを必ず琴を弾ずて時其ノ神琴上ゟ來坐て人よつきて命を詔さまふかり此ノ條書紀ゟ「時有神託皇后而誨曰」と有りて自他の差有り○建内宿禰ゟ大和國有智ノ郡ゟて居地ノ名建ゟ美称かり此ノ大臣六御代の朝ゟ仕奉りていと忠誠ゟ功積りて命長きかりおとゟ世ゟ比ゝく大凡三百歳ゟ餘不及のほゞかりけむ後世の書ゝもかゝるとゝぐ〻ちぐさならび古事記ゟ成務天皇段ゟ始て為大臣と有りて其ノ後仁徳天皇の五十五年ゟ見えて同五十一年ゟ見えて同五十一年ゟ為大臣と有りて其後仁徳天皇の五十年まで見えさゟ書紀ゟ景行天皇のせ勢天皇三年ゟ為大臣と有りて其後仁徳天皇の五十年まで見えさゟ續日本紀三天平八年の詔ゟ「昔者輕堺原大宮御宇天皇曾孫建内宿禰盡事君忠致人臣之節創為八氏之祖永遺万代之基云〻」と有りて其ノ後仁徳天皇の五十九でふき人有りて○沙庭ハ清場の切りてふるかて神の御命を請ふ場かり神功紀の為審神者ハ其所ゟ候ふ人を云へり○歸神ハ神代紀ゟ顯神明之憑談此云歌年鵜可梨ゟ崇神紀ゟ「神明憑倭迹迹日百襲姫命曰云云」ゟ顯宗紀ゟ「月神

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

著人謂之曰云云」ま〻天武紀ホ著神以言云云ホ㕝ヲ
ヲ俗ホ所謂託宣ホヲ抑此大后ホかく神の託ヽ賜へヲヽ
く財宝國(タカラノクニ)を言向(コトムケ)定め賜へる起本ホ〳〵て尋常の細事
ホ㕝らず土佐風土記ホ吾川郡王嶋或説云神功皇后
巡國之時御舩泊之皇后下嶋休息磯際得一白石圓如
鷄卵皇后安于御掌光明四尚皇后大喜詔左右曰是海
神所賜白真珠也故以為嶋名ま〻仲哀紀ま皇后泊豊
浦津是日皇后得如意珠於海中ういる事ル神の託
西方有國金銀為本目之炎耀種種珍宝多在其國吾今歸
賜其國

西方在國(ニレノカタニアリ)ハ書紀ま〻ハ直(ダヽ)ま新羅(シラギ)國と記ヽて明らかヲ
ヲ新羅を主(ス)ヽて三韓ま渉るべヽ○金ね和名抄宝
貨部ホ「雨雅云黄金謂之璗(徒黨反)其美者謂之鏐(力幽反)即
紫磨金也説文云銑(蘇典反)名古加祢(和金之最有光澤也)ま〻類
聚雜要ホ墨九玉ま〻許慎(ガ)説文ま「金有五色黄金為長
久埋不生衣百陳不輕ま〻財貨源流ま「金者金銀銅鐵
之總名惟黄者獨為之長久埋不為之生衣百錬不輕改
従革不遠四方之行獨以金名之彼銀白金次之銅赤金
又次之鐵黒金鉛青金錫亦白金鐵也又次之ホ㕝見ヲ
ま〻○銀ね和名抄ホ「雨雅云白金謂之銀(宣珍反)其美者

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10
ガラス使用

謂之鐐（和名之路加泥）故今其國を附屬賜ハむとおもほし
高天原よりの事あり且黄金よ非ざれバ
加泥として其品々鐵あり 三韓を神功
紀繼躰紀ニ金銀之國頴宗紀ニ金銀醬國武烈紀ニ銀
鄉あぞも云へる其國服（マツロ）歸ひてよる代々調物（ミツギモノ）ニ必ズ金銀
ハあるかくて皇國ニ金の出さるを 此御舉の後續日本
紀二ま文武天皇五年三月遣（ハラテ）ニ九海宿祢麻鯯（ヲ）于陸奥ニ治（ヲム）
金同月對馬嶋貢金建（レ）元為ニ大宝元年ト八月先（キヨリ）是遣（ハラテ）ニ大倭
國忌海郡人三田首五瀬（ヲ）於對馬嶋ニ治（レム）成黄金（ヲ）云とハ
ふぞ始あるとけふ同書十七ま天平二十一年二月陸奥
國始貢（ル）黄金（ヲ）奉（テ）ニ幣（ヲ）以告（ヲ）畿内七道諸社（ニ）

とハる大宝より天平廿一年まで四十八年あり何
ある子細ありけむ称徳紀ニ天平年中云云陸奥國馭
驛貢（ル）小田郡所（ニ）出（ル）黄金九百両（ヲ）我國家ノ黄金從
此始出（ヅ）焉とも見えさる能く考ふべきあるべし
銀の始て出さるを天武紀ニ三年三月對馬國司守忍
海造大國言銀始出（ヲ）于當國（ニ）即貢上云云凡銀有（ニ）倭國（ニ）初
出（ヲ）于此時故悉奉（ニ）諸神祇（ニ）云（ト）云と見えるとハ天武天皇三
年より二十八年前あり此時ハ天皇の御代ニ銀錢の見えさるを疑ハしきふしあり
韓國より渡せる〇目之炎耀（カバヤキ）ハ書紀ニハ眼炎と有とハ眼をゆき
かゞやかすあるど云意まて物語書あどニ目ゝのやと
云ふ似さる玉の玲瓏美麗あるを句玉（クガダマ）と云ふ句ハ借
字まて目赫玉（カクヤクタマ）の意ありと横井氏の云へるハ然るかと

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10
ガラス使用

る玉ありと云へる句字ふ泥みさる説よて誤ありと仲哀紀の壽言の天皇
如八足之變之句以曲妙御字とある句字ハ句の誤ちむとたのもハ思ふあり句とニホによて新撰萬葉集
ふ歌ふも詩ふも見えさり玉の玲瓏を御徳光よりそを申しさるものよて萬葉集の青丹吉寧楽乃京師者
咲花乃薫如今盛有とある趣あり委くハ玉のみほひと表書しさる一級の物よ辨へさるを含せ見るべし

○珍宝々神功紀皇極紀ふゐ

尊曰韓郷之嶋是有金銀若使吾兒所御之國不有浮宝

者未是佳也云云とあり既く幽契ありたふゐふべし

爾天皇答白。登高地見西方者不見國土唯有大海謂為詐

神而押退御琴不控黙坐。爾其神大忿詔凡茲天下者汝非

應知國汝者向一道於是建内宿禰大臣白恐我天皇猶阿

懐婆勢其大御琴自阿至勢以音爾猶取依其御琴而那麻那摩通

此五字以音控坐故未幾久而不聞御琴之音即挙火見者既崩

訖。爾驚懼而坐殯宮更取國之大奴佐而奴佐二字以音種種求生

剥逆剥阿離溝埋屎戸上通下通婚馬婚牛婚鶏婚犬婚之

罪類為國之大祓而亦建内宿禰居於沙庭請神之命於是

教覺之状具如先日凡此國者坐汝命御腹之御子所知國

者也爾武内宿禰白恐我大神坐其神腹之御子何子歟答

詔男子也爾其請之令如此言教之大神者欲知其御名即

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

答詔是天照大神之御心者亦底筒男中筒男上筒男三柱
大神者也此時其三柱大神今寔思求其國者於天神地祇
亦山神及河海之諸神悉奉幣帛我之御魂坐于船上而眞
木灰納瓢亦箸及比羅傳此三字以音多作皆皆散浮大海以可
度
驚懼(オドロキカレコミ)ハ天皇の忽ニ崩坐(リ)ぬるを驚き神の御崇(タヽリ)を懼(カシコ)む
なり○奴佐(ヌサ)ハ神ニ手向る物をし又祓ニ出す物をし
云ゝ麻なり神祇令ニ凡諸國須大祓者毎郡出刀一口
皮一張鍬一口及雜物等戸別麻一條其國造出馬一疋
參なゝかく祓物を出さしめて其國中の人民の身ゝ

の罪穢を祓ひ清むるなゝ罪ハ諸の凶事を云ふ必しも
又心と爲るのみならず悪行のうを云ふよりならびに
おそろしき凡て厭ひ悪むべき自然よりおこる凶事を云ふ○國之大祓
ハ國中悉の祓ふる由なゝ○真木灰(マキノハヒ)云
何(ナニ)のゝめと云ふを知がたし○本居氏云ゝ案ニ播磨
風土記ニ息長帶日女命欲平新羅國下坐之時云云國
造石坂比賣命教曰云云如此教賜(ヒキ)於此出賜(レ)赤土(ヲ)其土(ノ)
塗天之逆桙(ニ)建(テ)神舟之艫(トモ)舳(ヘニ)云云まゝ摂津國風土記ニ
昔息長足比賣天皇幸于筑紫國時云云曰吾所住之山
有須義(スキ)乃木各宜材採爲吾造船則乘此船而可行幸當
有幸福天皇乃隨神教遣命作船此神船遂征新羅(ニ)

の類よて神の御教ふるべけれバ必ず深き所ゟ居ゑ事
なるべきゆゑ
故備(カレツヅサ)如教覺整軍雙(レ)船度幸之時海原之魚不問大小悉負(レ)(レ)
御船而渡爾順風大起御船從(レ)浪故其御船之船瀾押騰新
羅之國既到半國(レ)(ニ)
書紀釋ゐ潮滿瓊潮涸瓊大問云此二種在何處哉先師
申(テ)云元暦之比宇佐宮監行之時本宮注文滿瓊涸瓊二
種在當宮之由注進(ス)之然(スレバ)則留(ル)宇佐宮(ニ)歟重(テ)仰云神功皇
后征伐三韓之時新羅海潮滿彼宮庭若令(レ)持此瓊(ヲ)御(ムカ)歟
如何先師申(テ)云宇佐宮者應神天皇姫神大帯姫三所鎮
坐也二種瓊已在當宮皇后征伐三韓之時就(テ)新羅海潮
滿(ニ)宮庭(ニ)思之(フニ)(レ)定令(メテ)持此瓊(ヲ)御(ムカ)歟然而無(レ)惚(ルル)所見凡神功皇
后有得(レ)(ニ)如意宝珠於海中之由見(エタル)彼皇后紀(ニ)耳とゐてこれ
もかの神代の二(ツノ)珠ゐやゐてけん将(ダダ)この海中よて得
賜へる如意珠ゐやゐてあむはざこのゐらば今如此御
船の浪の國半まて押騰(レ)しゐとゐはゆゐゆゐ其珠の
功ゐるべし奇(クシ)く霊(アヤシ)き神の御所(ミレ)爲(ワザ)申(ス)もゐらゐて書紀
ゐ隨船潮浪遠逮(レ)國中即天神地祇悉助歟(ル)まさ未嘗聞(レ)(ニ)
海水凌國(レ)まさ云(ニ)皇后爲男束裝征新羅時神導之由
是隨船浪之遠及(ニ)于新羅國中ゐどし見えゐて

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

於是其國主畏惶奏言自今以後隨天皇命而爲御馬甘毎
年雙舩不乾舩腹不乾栲機共與天地無退仕奉故是以新
羅國者定御馬甘百濟國者定渡屯家爾以其御杖衝立新
羅國主之門

國主ハ書紀よハ國王ともさ國主と書さるもの乏許爾
伎志とし許伎志とし訓べし北史又杜佑通典ゐどゐ
「百濟王号於羅瑕百姓呼爲健吉支夏言並王也」とい
乏〇御馬甘ハ雄略紀ゐ典「馬此云于麻何毘」と有るか
同ど又飼部馬飼ゐどし見えさ乏外宮儀式帳ゐ「御馬
甘内人」と云ふしなど殊よ卑き職ゐるを其をしし仕奉

むみせるハおさふるゐ深く厚く服從ふ由なり續日本紀
十五ゐ「免天下馬飼雜戸人等因勅曰汝等今負姓人之所恥也」と云ふさゐし見えさ乏〇渡屯家ハ
海を渡乏ぬく彼方ゐ在るを以て云ふり毎仁紀ゐ屯
倉此云弥夜気」となりて古ハ國ゝ處ゝゐ朝廷の御田
なりて田部と云ふ者を役ひて佃らしめて其御田ゐ成
せる稻穀を蔵むる御倉及其官舍をし合せ又其御田
をし色合せてし云ふ乏ばてまさ其御田を掌る人を田
令と云ふ又屯田司とし云ふり又其御倉官所を掌る人を
屯倉首と云ふ乏書紀ゐハ内ツ今海表の百濟を皇國内の
官家とゐり官家と云ふ乏〇新羅國ハ古事記ゐ新良書紀ゐ

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10
ガラス使用

斯羅とも書き鷄林とも此國なり此國の初を神
代紀に「素戔嗚尊帥其子五十猛神降到於新羅國云云」
又韓國嶋とあるも是なり萬葉集三に「新羅國從云云」
續日本紀十二に「新羅使金相貞入京云云新羅國輙改
本号曰王城國因茲返却其使」おどし見えたり名義は
即字音を用るなるべし○百濟國は北史に「初以百
家濟因号百濟」と云へり東國通鑑に慰礼は百濟の舊名
なるよし云へど雄略紀に「慰礼國まさ繼躰紀に扶余と
もなるも皆久陀羅と訓べし○此の條書紀には「新羅王
於是戰戰栗栗厝身無所則集諸人曰新羅之建國以來

未嘗聞海水凌國若天運盡國爲海乎是言未訖之間舩
師滿海旌旗耀日鼓吹起聲山川悉振新羅王遥望以爲
非常之兵將滅己國警爲失志乃今醒之曰吾聞東有神
國謂日本亦有聖王謂天皇必其國之神兵也豈可舉兵
以距乎即素旆而自服素組以面縛封圖籍降於王舩之
前因以叩頭之曰從今以後長與乾坤伏爲飼部其不乾
舩柂而春秋獻馬梳及馬鞭復不煩海遠以每年貢男女
之調則重誓之曰非東日更出西且除阿利那礼河返以
之逆流及河石昇爲星辰而殊闕春秋之朝忍廢梳鞭之
貢天神地祇共討焉時或曰欲誅新羅王於是皇后曰初

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

承神教將授金銀之國又号令三軍曰勿殺自服今既獲財國亦人自降服殺之不祥乃解其縛爲飼部遂入其國中封重宝府庫収圖籍文書即以皇后所杖矛樹於新羅王門爲後葉之印故其矛今猶樹于新羅王之門也云云於是新羅王宇流助富利智干参迎跪之取王船即叩頭曰臣自今以後於日本國所居神御子爲内官家無絶朝貢乃以〇阿利那礼河ハ朝鮮の鴨緑江なり阿利ハ鴨緑の音那礼ハ江の義川の韓語なり漢語へ和語を加へさるふて重語ねらびこのるおとをりく〇御杖云云前編よ〇書紀曰於是高麗百濟二國王聞新羅収圖籍降於日本國密令伺其軍勢則知不可勝自來于営外叩頭而歎曰從今以後永稱西蕃不絶朝貢故因以定内官家是所謂三韓也

おの條を本居氏不審して云高麗國ハ百濟より千餘里北方ありみえて皇國の今ゐ路程百餘里距て新羅へハ海して遠ゐれバ此大后の新羅を征賜ふ事を傳へ聞てはて人を遣て伺ゐせて其人の還て後其王新羅の御営まぢ参らむふハ速くそも六七十日を經べ一然るふ大后ハ十月三日ふ津嶋よ里御船開ー給ひて十二月十四日よハ既ふ筑紫ふ還坐て御子生坐里とゐれバ新羅國ふ止坐ー間ハいくそくもゐらじを

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

其間ニ彼王ハ以ツテ御営ニ得参ラム」トテ撰者
の加語アリト云ヘリ今謹テ熟案ニ此御征ハ凡テ神の
御心ニタヘタルマセバ彼所ヲ渡らせ賜ふも又還幸も
あゞ一時のほどありけむも知るべからず然るに新羅
の動静を伺ヒせさる事も今も一日ニ數十里歩行く
人も有ニバ上ツ代ニハいみじき疾足の人のありしと
もおぼえぬべく御船發より御凱旋まで凡七十日あれ
ど是を以て古傳を疑ヒなむハ此人ニ似げなき尋常の
考なりまして人の説ニ百濟國の朝貢初しハ同
御世ニおはら遥ニ後の事ニて新羅國を言向賜ヘル
同時ニその事ニハ非ざれバ此記ニ定渡屯家トなる
ニ後の事ニ彼ニ新羅を定御馬甘と云ヘる因ニ此段
ニ一ツニ連ねハ語傳ヘニはなり其王云ゝと云ヘるの
無きも此故ぞうし又高麗國の朝貢ハ百濟ニ
准ヘて思ふニ書紀應神巻ニ七年秋九月高麗人百濟
人任那人新羅人並來朝と有ニ是ぞ初あらむ假令此
初ニハ非ずとも應神天皇の御世ニ至て其事なりけ
むされバ此大后の御世の事ニならバ故ニ此記ニハ
此ニ其國の事を云ゝさはあるべし」とて神功紀の四十
六年の事を證とし云ゝ此説まさしくふぞや 四十六年の事

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

名下は辨ふべし　此三國の皇國ふ服從さるは彼御征伐のをおらびて何（イヅ）の時とこのせむ撰者の加語も事ふおそよれ如斯（カク）あたやけるうらぬ事を同書のうち前後うちなそばるさはふ記すべくもうらざるなり古事記ふ其王云を記さぐるは最初の國ふ違はざらむ事は其（ソレ）よゆなて再云べば新羅國定御馬甘百濟國定渡屯家」と書さる中よ其事の含（コモ）るは古文の體（サマ）なり高麗の凡べて見そばるは聊不審あれども仲哀紀ふ有宝國云云是謂栲衾新羅國まと應神紀ふ討新羅之年と」るも三韓を指（サシ）さるおとそえさるを此よ新羅とのみ書さる中よ島麗も包（カネ）て此條大うさ新羅を主（ツカ）さるおとそ百濟を是よ次ぎ高麗を末とおさるおれど二國よ異ふらざる古事ふは自然言傳へふ漏しあるふも有ぬべきふや今の俗談ふもはるる趣をもて行ふ事なり（警ばば從者）あひて人の許へ行て酒飲ミ物食ひなどしつる事をふ人よ對ひて物語ら云ミとは云ざるふ如しまさ論語憲問よ從者も云ミとは云ざる島の上を云べば孟子離婁下よ「尚稷躬天下」とはるる尚稷當平生三遍門不入」とはるるを云べばなり云ぞて其意を知（シル）する自然の勢も有ぬをきなり

柳古事記ふは稗田阿礼が暗誦せるを其まゝ文字を填さるふもの古事記よ倣ひて撰さる日本書紀ふ其體裁それをさ同ぐからばるもものあり然（サ）しぞ

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

此御挙よ其王云云ふ咎云ひ咎を毎國よ云ざるハ簡ふ〳〵て事足らへる古文の常ふるを其をし〳〵て百濟國者定渡屯家とふるを疑む書紀の高麗百濟二國王云ゝ從今以後永稱西蕃不絶朝貢とふふ以咎用ふるお咎を撰者の加語として取らざるなぜを最(イト)おかばかき業ならばやはてまさ三國入貢の事ル書紀よ載(ノ)于八十艘船令從官軍とふるハ御凱旋の時入貢しるおと明らかのまて二國王し彼不絶朝貢とふるよ違ハば新羅とゝもよ入貢しさる何の疑のふらむ同書ふ故因以定内官家是所謂之三韓也とふ

ふル三國ふ渉ヲて聞ゆるなり此時の動靜を熟考るふ若ゝゝ三國の官家よて取まのなむさふ朝貢の品を航海よ便能き新羅よ(ツカフ)然新羅のゝ入貢しあるやうかし聞ゆるまをふらばるの同巻五年春二月新羅まさ朝貢の事ふヲ(御征の條よ爰)新羅王波汰寐錦即以微叱已知波珍干岐為質(下)遂(二)先質微叱許伐旱之情とふるを思へを此間よル朝貢の船ハ來ふらむを書紀よ(ハ)見ざれば其後四十二年經ヲ同巻四十七年夏四月百濟王使久氏弥州流莫古令(二)朝貢(一)時新羅國調使與久氏共詣とふり本居氏ゝ此時を百濟國の皇國朕從の最初とし〳〵て四十六年の事を擧て前の加語と云ゝよルど已ゝを却て彼四十六年の事を疑し

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10
ガラス使用

天書　神功皇后段四十六年春三月己亥朔遣斯摩宿禰於百濟傳詔旨云云　四十七年秋九月丙寅朝貢之罪矣云云　日本紀と甚異なり僞書なるべし攷ふべし

く思ひなり　同巻の中ふ前後打合さる事やそ考ふるふ此前「三十九年是年也大歲己未まさ「四十年」まで「四十三年」たの年みる魏志ニ云云云云記されさるふミおどま在る事を彼ニ云云おどら云らむさ陵ま記さしさるごふと紛ひて本文まおきもるふも有らむら四十六年しからふミおどま在る事を彼ニ云云おどら云らむさ陵ま記さしさるごふと紛ひて本文まおきもるふも有らむら四十七年の下も「於是皇太后」以下「撿校二國之貢物」まで前年の事まちまて後人の加語なるべく分註ま「志摩宿禰者不知何姓人也」と云。爾波移」と云人も皇國人の名乃やうまも伝らげ新羅も其他疑もしき事ども多のり別まちらせま

四十二年朝貢を怠るべきふ伝らげ若「怠りおバ同巻六十二年の如く新羅不朝」と記そべきをけも伝らざるを常の朝貢のミまて他事おきをりそ書紀まを記し賜そざりけむ

其後まき同書應神巻ま「七年秋九月高麗人百濟人任那人新羅人並來朝時武內宿禰領諸韓人等作「池以名「池号韓人池」と伝ま高麗人來朝を初て此書ま見えざれど此時入貢の初とも

ざる伝まふれど此時を高麗國服從の最初ありと本居氏の云るもいふまかあらむ此時ハ神功紀四十七年の百濟國入貢より三十年ま御征りより七十二年の後なりけて古事記ま高麗を見えざれバとて七十二年後ま何の所以も無く初を來朝しを池を作りたるを彼御征の條ま三韓とをいふべき然るを本居氏彼神功紀四十七年應神紀七年の事どもを百濟と高麗との服從の初とし彼古事記の渡屯家も後の事あるを新羅を定御馬甘と云ふ因ま此段ま一ッま連てを語傳へまるなりと云て彼御言向を新羅國のことそるをいふべき妄解なりけて高麗ハ古麻と云又狛とも書彼隣國ま穢貊

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

と云、國ゟ又後漢書ゟ句驪一名貊耳と云。又其、別種ゟ小水貊と名づくる者も有ゟさるを貊と云、ゟ其、有ゟ扨凡ゟの舊名ゟ今ゟやゟ有ゟけむ又加羅國と云、ハ崇神帝仁の御代ゟり任那と見えゐ國、中の一國ゟを崇神天皇の御代ゟ外國の始て參ゟしゟ此、國ゟり故西方諸外國の大名と有ゟて三韓を七漢國を七みゟ加羅と云、ゟりれゟ欽明天皇の御代ゟ任那ゟ新羅ゟ滅さるゟ一國ゟゟ神功紀ゟり此加羅國を其時の舊名を遣しゝゟ次ゝみ七見えゐり聖武天皇の御世神龜五年ゟ勃海國と云ゟり使、を奉遣しはつろひ參れゟ此ゟ高麗の別種ゟゟ姓ゟ大と云、高麗滅ゟ後其、有ゟゟの國を有ち勢大なゟしゟ者ゟりとゟ唐書五代志なとゟ傳あゟ皇朝ゟ始めて參ゟしゟを大武藝と云、ゟ今、京ゟゟて延喜のゟろまで七參れり宝龜八年ゟ使を文徳実録一ゟ高麗國遣使と記さ又源氏物語桐壺の巻ゟゟ高麗人ゟ參ゟしゟ云、しゟ王ゟ時なり其、後相、續きかくて古、の高麗朝鮮三韓などの有ゟりゟ今ハ皆一ッゟ合せゟ朝鮮の域なり又漢國ゟ推古天皇の御代よゟ大御使を遣しゟ彼、國王ゟり七使を奉ゟてゟ參通ひ初ゟゟゟゟ高麗國を辭ふゟゟ巻の初ゟでゟ彼、國のうつろひ來しゟゟをのつゝ書つゟ有ゟるゟゟて後ゟ立帰り御征の事を云、むゟ前ゟ云、る如く四十年ゟ

一度三十年小一度朝貢するを毎年雙舩不乾舟楫不乾楫とゐひ云ふべき他事ある朝貢を書紀ぎなり是も古事記の文章のさうを思ふをど書紀かも不乾舩楫を書き其後の御代かも推古紀の新羅任那二國王の表小天上有神地有天皇除是二神何有長平自今以後不有相攻旦不乾舩楫毎歳必朝まと持統紀ま新羅元來奏云我國自日本遠皇祖代並舩不乾奉仕之國まと續日本紀十八か新羅王子金泰廉等拜朝并貢調因奏云新羅國王言日本照臨天皇朝庭新羅國者始自遠朝也く不絶舟楫並連來奉國家云ミまと卅六

小新羅使獻方物仍奏曰新羅國王言夫新羅者開國以降仰賴聖朝世ミ天皇恩化不乾舟楫貢奉御調年紀久矣云ミまと天智紀ま賜新羅王輸御調舩一隻など御世御世皇國小服從さるさまるかを當時御征伐の後四十二年朝貢を怠るべきまゐらば新羅の入貢を記さゞまバ百濟高麗も記さゞるべきなり朝貢せさるをバ六十有二年新羅不朝なゞめるを思ふべし然ル彼此參考ゝ彼御征の時新羅を初書紀の如く三國同ゝ仕まに服從あるもまとすべきあるを

即以墨江大神之荒御魂爲國守神而令鎭還渡也

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

國守神ハ韓國ヲ鎮メテ背クカサヽラセバ遠永ニ皇
朝ニ服シ朝貢スヘク護賜フ神ナリト本居氏曰遷渡也
テ新羅國ヲ鎮給フ如ク聞ユルハイウサヌ又長門ナル
トヽ別ニ新羅國ニモ鎮祭給ヘルヨトモ云ベケレドモ
ナホ然ヨヽラヽト云ヽ此ヽモ皆遷渡ト云カヽヨヽ
字ノ次ヨリ在ク次ヨリ即以云ヽトカリケム語ヲ阿礼ガ
誦ウカベシヽリヽ間アヤマリヽヲヨ次序ヲ誤リヤヽラムモ今
云ルヲ以テノミ他邦トイヘドモ今如此服従テ渡化家ヲ
内官家ト定賜テムヨラヽヨヽヲ其地ヨリ祭鎮給モムモカ
テフカヽリカラムモ萬葉集十五ヨ新羅國ヨリ往カヽヲ
須賣呂伎能等伊能良國ニ和多流和賀世波ヲ
云ヽト云カヽリシテ偏國トナヽテノ上ヽヽミナ天
皇ノ志ロシメヲ國アルヲヤ○荒御魂ヽヽ神ノ御霊ヲ和御魂荒御魂
ト對ヘ言ヽヽ名ヽ其徳用ヲ云名ヨリテ全體ノ御霊ヽ御霊
ハヽヽヲ此ニッ外分ヨリ外無キヨヽヽラバ譬バ一ッノ父ヲ獨ト
薪ト小著ヨリ如ク全體ノ御霊ハ本ノ父和御
魂荒御魂ヽヽ獨ト薪トノ外ノ父乃如クナルモノナリ○書
紀ヽヽ名皇后従ニ新羅還之十有二月戊戌朔辛亥生ニ誉田
天皇於筑紫ニ故時人號ニ其産處ヲ曰ニ宇添ニ也於是従レ軍神表
筒男中筒男底筒男三神ヲ祭ニ於穴門
山田邑ニ也時穴門直祖践立津守連祖田裳見宿禰啓ニ于
皇后ニ曰神欲レ居レ之地必宜ニ奉定ニ則以ニ践立ニ爲ニ祭荒魂ニ之主ニ上
仍立ニ祠於穴門山田邑ニ也ト
（並名大神ヲ仍ル是ナリ編年集成ニ山田村ト云ヨリ此神墨江ヨリ祠ヲ遷ルヲ以テ後ノ
ルヽヽヽ語傳ヘルヽヽ常ノ事ナリト本居氏名是ヲ古事記ヽ傳ヘ
ムヾめヽヽヽ

鎮ざまへ乎ふて別なる傳へなるべきをも
故(カレ)其政未竟之間其懷妊臨産即為鎮御腰取石以纏御裳
之腰而渡筑紫國其御子者阿禮坐阿禮二字以音故號其御子生
地謂宇美也亦所纏其御裳之石者在筑紫國之伊斗村也
以下ハ新羅國ゟ渡坐ざる前筑紫國ゟその事なり
○渡筑紫國(ワタリキシレキ)ゟ韓國言向竟て還渡來坐るゟり故渡字
をワタリキシレ等訓べし書紀ゟい御舩發の前ゟ適
當皇后之開胎皇后則取石插腰而祈之曰事竟還日産
於茲土其石今在于伊覩縣道邊と見えたれど此石の事
筑紫風土記前風土記萬葉集等ゟなれど○宇美(ウミ)い筑
前國糟屋郡ゟ宇添村なりて宇美神社なり八幡大神を祭る
云(イヘ)り愚管抄ゟ筑紫ゟ還(カヘ)りてうみの宮(ミヤ)に榎(エノキ)ゟ生(ウミ)給(タマ)ひけるとなり今ゟ植
継て社内ゟ大なる榎樹(エノキ)なりぞ○伊斗(イト)村(ムラ)ゟ和名抄ゟ筑前國怡土(イト)以下止
郡是なり仲哀紀筑前風土記ゟ此地の事を記しゟり
魏志倭人傳ゟ伊都國とかゝるも此地なるべきなり
此太子之御名所以負大鞆和氣命者初所生時如鞆宍生
御腕故以名焉其御名是以知坐腰中定國也
此太子の御上の事を仲哀天皇の段神功皇后を初て
記しゟる所ゟなれどゟ今此ゟ擧ゟるゟい見易(ミヤス)うゟむ
ゟめゟり書紀ゟい應神天皇卷首ゟ初天皇在孕

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10
ガラス使用

而天神地祇授二三韓一既産レ之宍生二腕上一其形如レ鞆是肩下
后為二雄装之負一レ鞆故称二其名一謂二誉田天皇一上古時俗号レ鞆
云 今俗謂二大鞆別尊一云云 此説甚非也 鞆ハ
とこく誤てさる傳へあり 鞆ハ可レ謂二誉武天皇一云べきを亦御名と紛まてふ
と云るが如し 絶て無し 御胎中より既く此 御肉の有て生レ坐るを
て神功紀 神託の言 汝不レ得二其國一唯今皇后始之有レ胎其子有
レ獲焉 汝ハ仲哀天皇其 又汝王必不レ得二其國一唯今皇后懐
レ獲焉 國ぬ三韓ぶて 細書を誤ること何やまりを重
雄之子益有レ獲歟まさ継躰紀よ夫 注ぶる注ぶり鞆を褒武多
金銀之國高麗百濟新羅等授二記胎中誉田天皇一まさ自
胎中之帝置二官家之國一官家之國 三韓ぶり
まさ夫 海表諸蕃自二胎

中天皇置二内官家一云云 宣化紀 詔よ海表之國云云自二胎
中之帝一洎二于朕身一云云ぶど三韓を得賜ハ事を此 胎
胎中天皇と申御称ぬて 中之天皇よ関ぶて申ハ其
向の事よ句りて申ハ御名ぬて 韓國御言
て蕃國(ミヤツコクニ)と志賜へるを云ぶなり 〇定國(カタメシクニ)ぬ征伐(コトムケマツロハ)服従へ
亦到二坐筑紫末羅縣之玉嶋里一而御二食其河邊一之時當二四月
之上旬一爾坐二其河中之礒一捉二取御裳之糸一以二飯粒一為レ餌釣二其
河之年魚一其河名謂二小河一亦其 故(カレ)四月上旬之時女人捉二裳
糸一以レ粒為レ餌釣二年魚一至二于今一不レ絶也

此一條古事記よハ新羅遠征の後鎮懐石の次よ記して
別段(コトニ)ぶるを書紀よハ御船發以前の本文よ夏四月壬

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10
ガラス使用

寅朝甲辰北到二火前國松浦縣一而進二食於玉嶋里小河之
側一於是皇后勾二針爲一鉤取一粒爲一餌抽二取裳糸一爲一緡登二河中
石上一而投レ鉤祈レ之曰朕西欲レ求二財國一若有二成事一者河魚飲
鉤因以擧レ竿乃獲二細鱗魚一時皇后曰希見物也（希見此云二梅豆邏志一）
故時人号二其處一曰二梅豆羅國一今謂二松浦一訛爲是以其國女
人毎當二四月上旬一以レ釣投二河中一捕二年魚一於今不レ絶唯男夫
錘レ釣以不レ能レ獲レ魚（獲レ魚此云二阿耆一）と伝へ案るに此は祈之曰云々とある
を強て物めうさむとせるは撰者の加語よりいでたらざ
るこの御此、御征伐を神の御誨ある我若有二成事一者ふぞ
を彼、御教をかしこみ賜ふよりよくさるからずや已（ヌ）デ

ふ仲哀天皇神の命を疑ひ給ひまして御祟を蒙り給ふ
しかぶりと畏き事あるを書紀ふはれ船欲二西征一是
以今頭沐二海水一若有レ驗者髪自分爲レ兩（ふたつ）ゝ見えさせ
古事記ふは此、御挙ふ御祈（ウケヒ）の事無し實ふ正き古傳と
云、べきあり書經洪範ふ稽レ疑擇二定ト筮人一云」まさ春
秋左氏傳ふ「ト以決レ疑不レ疑何ト」とも見えた
さるなどき思ふなり然るを古事記傳ふ勝門比賣名義ハ書紀
ふ此、時大后祈ひ給ひしふ名（ナヅ）けるかやならむと云、
羅ふ勝給へる由ふて後ふ名けるなればハ其、意以て新
已名義ハはも有なけれども祈（ウケヒ）の事ハ無うてあり
書紀を混（マジ）て説さるハ精しからずと云、べしはて此御

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10
ガラス使用

征伐の始末を熟思ひ渡し奉るに奇瑞異祥最く多くして中に疑ハしくはべれがゆるふしく無しもさえからざるが如くあれどもこれ是うた神の御心かたたゝませバ實に古傳のはしに有けるなるべし弘安の頃も也もしみくぐとふみれど蒙古の賊船を一時に覆没しさるなど皇國の書籍のそらばゝ彼國の書ふし癸辛雜識續集に「大軍征二日本一云云夜半忽大風暴作諸船皆撃撞而碎四千餘舟呼存二百而已全軍十五萬人歸者不レ能二五之一」また元史に「至元十八年云云率十萬人征二日本一云云至二日本一欲レ攻二太宰府一暴風破レ舟云云八月一日風破レ舟云云十萬之衆得還者三人耳」また

と李庭傳に「東征二日本一軍次二竹嶋一遇レ風船悉壊」また相威傳に「范文虎李庭以二兵十萬一航海七晝夜至二竹嶋一八月朔颶風大作士卒十喪二六七一」また日本傳に「十萬之衆得レ還者三人耳」また歷史綱鑑補に「至元十八年秋八月擊二日本一兵十餘萬一ヒ海島一還者僅三人」また續通鑑綱目に「得レ還者財三人一」また東國通鑑に「元軍不レ返者無慮十萬有幾我軍不レ返者亦七千餘人一」などに見えたり或人曰古事記の其「國主畏惶」日本書紀の「新羅王於是戰戰栗栗」を孫子のいへる「不レ戰而屈二人之兵一」となり云、もど其の人の智術の致ス所なるべし此御言向を隆盛ゝゝの神威ま

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

特1000
10

依るとおろよて其さ陸同じきご如くなれども其意
等しからば他邦の人なれ々事の心ろくしもあとらば
して後漢書ふ桓靈間倭國大ニ亂更相攻伐歴年無ク主有ニ
一女子名曰ニ卑弥呼ニ年長不ク嫁事ニ鬼神道ニ能以ク妖惑ニ衆於
是共立爲ニ王云云桓帝々建和霊帝々建寧ふて我朝の
なり然れども爲ニ王なども云ふハ此皇后を指て書るもの
あるべし魏志ふも卑弥呼とあり是ハ時代此皇后よ
大方當れる ふど見えさる霊妙不測の神乃御ミ呼ワ爲を以ク妖
惑ニ衆ニ等ク思へ爲以ク畏き事ならばや神國の他
邦ふ異なる由々申ス也ろおなるふ卑弥呼
古阿那可志古

神原家圖書記

国立国会図書館　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用

国立国会図書館　　神兵稜威考　特1000-10

ガラス使用